

はや20年が過ぎました。未  
曾有の大災害の直後、多くの  
の障害者は「避難場所がわ  
からず、避難できなかつた」  
「避難所に行つたが、段差があり入  
れなかつた」「大人數の中  
で暮らせず壊れた家に帰つ  
た」「家族で車の中で暮ら  
していた」「情報が入らなかつ  
た」「病院が壊れ、薬が得られなかつ  
た」「風呂やトイレが使えなかつた」  
など、大変な困難を強いられました。  
そして、震災後も「気持ちが不安  
定になつた」「経済的に困つてゐる」  
「外出が困難になつた」「住まいを

未くわく「」入阪

なり、より介護が必要になつた」など、長期間にわたつて苦しい生活を余儀なくされ、また、震災で新たに障害をもつ人も生まれました（震災障害者328人、兵庫県調べ）。

阪神淡路大震災から20年

た」な  
生活を  
新たに  
（震災）。

障害者にとって、これらのことでの災害から生命が守られ、生き伸びることができるのでしょうか。障害のある人への防災は、①日常生活から一人ひとりの障害や暮らしの状況に応じた支援策が行われていること、②一人ひとりに防災についての自覚を促す施策の実施、③一人ひとりの避難支援策の策定、④日常生活や土石流危険地域に住む要支援者への対応は、地域任せにせず行政が早急に一人ひとりの状況を把握し、支援策を立てる求めます。

障害者にとって、これらのことでは災害から生命が守られ、生き伸びることができるのでしょうか。障害のある人への防災は、①日常生活から一人ひとりの障害や暮らしの状況に応じた支援策が行われていること、②一人ひとりに防災についての自覚を促す

リー、情報システム。

②避難所の態勢の見直し。メンタルヘルスケア、支援者の確保。

③避難所の運営の見直し。障害者とその家族に配慮した運営。

④避難所の環境の見直し。福祉的スペースの確保。

現在、つどいの報告集を作成するための作業に入っています。報告集を希望の方は、兵庫障害者センター(TEL078-341-9544)に連絡ください。なお、当日は63名の方からアンケートにご協力いただき、貴重な意見・感想をいただきました。ありがとうございました。

スマップも作られています

o

①避難所の構造の見直し。バリアフ  
障害者に優しい避難所をつくる

阪神・淡路大震災の被災地では、一般人の死亡率が0・2%であったのに對して、障害者の死亡率は0・6%～1・6%（障害者団体の調査から）。

◇災害の進行と障害者の被災

障害者は、地震時、避難時、避難生活時、生活再建時のそれぞれの段階で、そのハンディキャップゆえに健常者に比較して被災するリスクがあつた。

①危険回避ができずに被災。危険が察知できない、俊敏な対応がどれない。

②生命線が絶たれ被災。医療機器が停止、薬や介護用品が喪失。

③避難行動がスマートにゆかず被災。経路上のバリアの存在、車いすなどの使用が困難。

④避難所の環境に適合できず被災。福祉的環境が欠如、福祉避難所が不足、混亂の中で対応が後回し。

⑤生活再建がスマートにゆかず被災、経済的格差などにより住宅再建が遅れる。

◇障害者への対応  
　災害時の障害者には、2重の支援が必要。被災者への支援+障害者への支援。  
◇日常的取り組みの強化  
　日常生活から、障害者を見守る態勢をつくり、ハード＆ソフトのバリアをなくす取り組みをし、安心できる住まい＆施設を供給し、支え合いのコミュニティをつくることが、災害時の障害者の安全や安心につながる。

「地域にみあつた災害対策」「災害時に役立つ名簿管理」「コミニティづくりこそ最大の防災」等々。  
◇避難誘導のあり方  
障害者を見捨てない避難態勢をつくる。  
①地域ぐるみの避難誘導。「みんなで避難、みんなが助かる避難」  
②実効性のある要支援者台帳づくり。  
「支援ネットワークとの連動」  
③有効な輸送＆搬送の手段の確保。  
「福祉バスの活用」  
◇避難所のあり方

【実践報告】  
つどいでは、JDFいわて支援センターの栗田誠さんが、「ノーマラ イゼーション」という言葉のいらないまちづくり」と題して、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県陸

前高田市の「一陳から者格言」  
(平成25年3月策定)の実現に向けて、ノーマライゼーションという言葉のいらない社会とはどんな社会かどうすれば共生社会を構築できるかという観点で設置された障がい当事者を中心としたワーキンググループ

【基調講演】  
統いて、室崎益輝氏が「災害時、障害者に立ちはだかる社会的障壁」とテーマとした、基調講演を行いました。

## 立ちはたかる社会的障壁

阪神淡路大震災から20年、東日本大震災から4年。そして、南海トラフ地震が予想される中で、NPO法人「つどい」を神戸市勤労会館で開催

本大震災からもう  
天地震の発生が想  
い、兵庫障害者センター  
「災害と障害者の  
じしました。

今回のテーマは  
経験と教訓を伝え  
遠くは京都の網野  
える障害者・家族  
じしました。

「神戸淡路大震災20年—障害者の  
新たな災害に備える」であり、  
福祉職員を含め、200名を超  
幅広い労働者や関係者、市民がつ